



Title	『松浦宮物語』と「松浦」関係説話
Author(s)	海野, 圭介
Citation	詞林. 1994, 15, p. 67-71
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67350
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『松浦宮物語』と「松浦」関係説話

海野野 圭介

『松浦宮物語』は、早くに小山田与清『松浦物語考』によつて、「松浦宮物語というよしは、上巻に、…〈中略〉…こそよりまつらの山に宮をつくりて、帰りたまはむまては、そなたの空を見む云々…〈中略〉…下巻にさしもまもりつよき御道のしるへなれば、まつらの宮にまちよろこひ給ふほとこの事も、た、おしはかるへし云々、などある詞によれる也けり」と母宮が松浦の山に宮を作り弁少将の帰路を待つ、という物語中の一要素が「松浦宮」という命名の由来であることが指摘されている。しかし、物語中「松浦」ということば自体も、与清が物語から抜粋した二箇所に見られるだけであり、「松浦」の山で母が待つという要素も、以後の物語展開にどのように関わるのかは今一つ不明瞭である。このような、物語の進行上それほど重要な役割を果たすとは思われない「松浦」という語を物語の標題とするという、作品の名と物語内容の齟齬は、すでに諸氏によつて物語構想の破綻として捉えられてきた。

「松浦」という要素が物語の展開にどのように関わるのか、物語の構想は破綻しているのかといった問題は慎重に問われな

ければならないが、「松浦宮」という題号の命名理由について、錦仁氏は、母宮が「松浦の山」に宮を造り子を「待つ」、また、母宮だけではなく弁少将と関係する女性が常に「待つ」人の役を負わされる、という点に注目され、「松浦に宮を造つて子の帰りを待つ」という『松浦宮物語』の題名のゆえんを指摘し、「題名の意味はゴールまで貫かれているといえよう」という見解を示された(1)。

確かに、母宮が子を待つ、という場面は『松浦宮物語』冒頭部と末尾部に位置し、物語を挟み込む形で大枠を構成し、登場する女性は皆「待つ」人であるが、物語の構想の面に戻って考えるのならば、その展開との関わり、内部に散在する他の要素と「松浦」との相互の関係など、なぜ「松浦」である必要があるのかという問題は依然残されたままである。小稿では一つの試みとして、「松浦」に関係する先行説話類を概観し、「松浦」の語の敷衍する範囲、「松浦」関係説話が何処まで『松浦宮物語』の構成素材として構想に関わる可能性を持つのか、という点を考えてみたい。勿論、以下に参照する「松浦」をめぐる説

話・物語を以て、単純に『松浦宮物語』作成上の直接典拠とは認められないことは承知の上である。

『松浦宮物語』で母宮が宮を造り弁少将を待つ場所とされる、「松浦」の地名を付す説話の初見は、『肥前国風土記』松浦郡の記事であろう。『肥前国風土記』は松浦郡内の地名を列挙し夫々由来を説くが、その中の一つ、「褶振峰」の項は、任那に向かい船出する大伴狭手彦を送る弟日姫子が、「褶振峰」に登りひれを振り狭手彦を招いた故事を挙げ、「褶振峰」の命名の由来とする。この説話は以後諸書に展開される、所謂「ひれ振り」説話とほぼ同形であるが、『肥前国風土記』では、ひれ振りをした人物を弟日姫子とし、中世説話集に見られるような「(松浦)さよ姫」の名は挙げられない。

ひれを振る女性の名を「さよ姫」とし、以後の「さよ姫」を女主人公とする「ひれ振り」説話の原型となったと思われるのは、『肥前国風土記』ではなく『萬葉集』巻第五所収の山上憶良の歌とその詞書である。『萬葉集』巻第五・八七一番歌詞書には、

大伴佐提比古郎子 特被朝命 奉使藩国 熾樟言焔 稍赴
蒼波 妾也松浦 箒鬘 嗟此別易 歎彼会難 即登高山之嶺
遙望離去之船 悵然断肝 黯然銷魂 遂脱領巾塵之 傍者
莫不流涕 因号此山曰領巾塵之嶺也 乃作謠曰

と大伴佐提比古が藩国へ訪れることになったことを嘆き、高山

に登りひれを振った故事が挙げらる。これは『肥前国風土記』と類似する説話であるが、『萬葉集』では、ひれを振る人物の名を「妾也松浦 箒鬘」と「さよ姫」であるとす。これらの「ひれ振り」説話は、『松浦宮物語』にも「あまつひれふりけむためし」(角川文庫本でいえば「五」松浦の宮・一九頁)とあることから、「松浦」という地名を持出すにあたって意識されていたらしいことが伺われる。

「松浦」と「さよ姫」「ひれ振り」との結び付きは『松浦宮物語』に限ったものではなく、平安末期から鎌倉期の和歌においても、名所歌枕「松浦」を歌に詠み込むには、『堀河百首』基俊歌(初恋・一一三二)にも「このまよりひれふるそてをよそにみていか、はずへきまつらさよひめ」と見えるような、歌枕「松浦」と「さよ姫」「ひれ振り」とを結びつけて詠むものがほとんどであり、歌枕「松浦」と「さよ姫」「ひれ振り」との結びつきは、言うまでもなく強い(2)。また、説話集類においても、時代が下る資料ではあるが、『十訓抄』(古典文庫本 第六一・二六)(3)、『古今著聞集』(和歌部六・一七九、一八〇)なども、「松浦」に関係する「ひれ振り」説話を掲載するが、やはり「さよ姫」を主人公とする。

『松浦宮物語』を見ると、説話集類とは異なり、「ひれ振り」説話自体が続いて展開されることはなく、前掲部分に母宮が、「あまつひれふりけむためし」と一言「ひれ振り」に触れるにすぎない。別れの場面に「ひれ振り」の一語が添えられるもの

には『落窪物語』巻四の帥中納言が九州へ下る時に「いまはとて島漕ぎ離れ行く舟にひれ振る袖を見るぞかなしき」の歌が贈答される例がある。この場合も、やはり『松浦宮物語』同様に「ひれ振り」説話への言及はなく、単に「待つ」と言うための慣用句的表現として用いられているようである。これらは、歌枕「松浦」と「さよ姫」の結びつきの強さのため、説話の内容、その因縁を説かなくとも「ひれ振り」の語のみが独立して使用されるだけで、別れの悲しみを強調する役割を果たすためである。だが、『松浦宮物語』では「松浦の山に宮をつくりて」とあるように、別れを嘆く母宮が宮を造る場所も「松浦」の「山」に設定されており、「ひれ振り」説話を強く意識させる。やはり「待つ」という要素以外にも、「松浦」という語（場所）は物語に対し何等かの意味を持つと思われるのである。

それでは、他に「松浦」に関係する先行説話類が、『松浦宮物語』の構成に関わる可能性は、考えられないのだろうか。『新編国歌大観』の範囲では、平安末期から鎌倉期の和歌実作に詠み込まれた例は確認できず、「十訓抄」「古今著聞集」などの「ひれ振り」説話を挙げる説話集類にも付記されないが、「ひれ振り」説話との関係を持ちながら、ある程度広範囲で流布したと思われる説話が存する。院政期歌字書の集大成ともいえる『袖中抄』を見てみたい。『袖中抄』の「マツラサヨヒメヒレフリノミネ」の項は、「顕昭云」「万葉第五云」などと

して七書を引用し『萬葉集』巻第五・八七一番歌の注解を試みるが、その中に「童蒙抄云」として『和歌童蒙抄』を引く部分がある。

童蒙抄云 肥前国風土記曰 昔武小広国押橋天皇之世 大伴狭手彦連任那国シツメカネテ百斉ノ国ヲスクハムガタメニミコトノリヲウケタマハリテコノムラニイタリヌ スナハチ篠原村弟日姫子ヲ媁トシツ 其形人ニ勝タリ 別去日鏡取而婦ニアタフ 婦ワカレノカナシビライダキテクリカハヲワタル アタフルトコロノ鏡ヲダイテカハ ニシツミニヌ コノカバミノワタリト云々 狭手彦連フネイダシテサル時 弟日姫子コノニノボリテソデヲモチテフリマネク是故ソデフル峯ト云々 狭手彦連スコシカレコレタガヒタリ

(『袖中抄』)

ここには、「ひれ振り」説話と共に「形見の鏡」説話が見える。「形見の鏡」説話は、『和歌童蒙抄』が「肥前国風土記曰」と示すように、「肥前国風土記」に出典を求めることができるが、『肥前国風土記』では、「ひれ振り」説話を記す「襷振峰」項とは別に「鏡渡」項に記される(4)。この両話は、本来別項目に記される別話であるため、『和歌童蒙抄』自身がすでに末尾に「狭手彦スコシカレコレタガヒタリ」と指摘するように、同一の人物の話としては結末部分が矛盾するが、狭手彦・弟日姫子という人物名の一致により、『和歌童蒙抄』は「タガフ」としながらも、それぞれを異伝として捉え併記する。『袖中

抄』では、この『和歌童蒙抄』の記事は前記「萬葉集」巻第五・八七一番歌詞書などとも並べられ、「マツラサヨヒメ ヒレフリノミネ」の項の下に類聚される。この「肥前国風土記」に
出典を持つ「形見の鏡」説話は、「松浦(さよ姫)」をめぐる
歌学説話の中で、大伴狭手彦を仲介に「ひれ振り」説話と交錯
する異伝・異説として理解され、併記される形で踏襲されたの
であろう(5)。

ここで一つ気にかかることがある。「松浦宮物語」の末尾に
も、弁少将が帰朝する際に形見として鏡を受け取る場面が存す
ることである。別れの形見に鏡を送る形の説話の成立と展開に
ついては、奥津春雄氏「室町末期の竹取説話―付・形見の鏡の
成立―」(徳島文理大学 文学論叢 第2号 昭60)に詳しく、
中世に行われた竹取説話にこの要素が付随することが、その展
開を追って指摘されるが、竹取説話に付記される「形見の鏡」
の要素の早出例は、「古今和歌集序聞書 三流抄」などの鎌倉
中末期古今集注釈書であり、「松浦宮物語」に見える「形見の
鏡」の要素は、竹取説話の系譜以外のものではあるけれども、
比較的早い時期の例といえよう。

「松浦宮物語」に見られる「形見の鏡」は、別れに際し、女
性から男性に贈られるという形をとる。「和歌童蒙抄」「袖中
抄」所収「肥前国風土記」は、男性が女性に贈るといふ形をと
り「松浦宮物語」とは男女が逆であり、「松浦宮物語」の例は、
むしろ竹取説話に近い形である。しかし、「形見の鏡」の要素

を含む竹取説話が、「古今和歌集序聞書 三流抄」以上に溯れ
ない現時点では、この要素を含む初出例である「肥前国風土記」
の「形見の鏡」説話を引用し、それを「ひれ振り」説話と併記
する「和歌童蒙抄」「袖中抄」の記事は注意する必要がある。

冒頭にも記したように、「和歌童蒙抄」「袖中抄」所収記事
が「松浦宮物語」構成要素の直接典拠であるとはいえないが、
「和歌童蒙抄」「袖中抄」の記事では、男主人公大伴狭手彦が
大陸(6)へ渡る理由も他国の乱を平定するためであるとされ、
このような「松浦」関係説話の要素を「袖中抄」から拾い集め
てみると、①松浦の山から男主人公を見送る、②大陸に渡り他
国の乱を平定する、③形見の鏡の存在など、「松浦宮物語」と
類似する点が幾つか指摘できる。「松浦宮物語」の作者を定家
と断定する証左はいまだ見ないが、「袖中抄」のような、恐ら
く多くの異伝・異説を類聚することを一つの目的としたであろ
う歌学書を身近に持つ人物であれば、そこに収集された既存の
「松浦」関係説話類から「松浦宮物語」にも見られる要素の内
幾つかを得ることは容易であったらう(7)。

注

(1) 「定家と物語―『松浦宮物語』試論―」(『論集藤原定
家』和歌文学会編 笠間書院 昭63・9)

(2) 歌枕「松浦」と共に「ひれ振り(さよ姫)」の故事以外を和歌に詠むものには、『松浦明神本縁起』などに見られる鏡宮明神を詠み込む、『紫式部集』(十八)「あひ見むとおもふこころはまつらなるかがみのかみやそらにみるらむ」、「俊忠集」(二四)「いかてわれこころつくしのまつらなる鏡にかけてみゆるわさせむ」などの例がある。また、『源氏物語』玉鬘にも「君にもし心たがはまつらなる鏡の神をかけてちかはん」の例があり、この部分に「河海抄」は「或古老物語云」として「肥前国松浦郡鏡明神」の縁起を挙げ注するが、このような「鏡宮」を伴う例は概して小數である。

(3) 『十訓抄』は、軍に出向いた男を待ち続けた女が石と化したという「望夫石」の故事に対する「我国」の例として「ひれ振り」説話を併記する。

(4) この「形見の鏡」説話の結末は、『肥前国風土記』では「分別之日 取鏡与婦 々含悲涕 渡栗川 所与之鏡 絶沈川 因名鏡渡」と、弟日姫子の持つ鏡の緒が切れて鏡が川に沈んだとされるが、『和歌童蒙抄』は、弟日姫子が鏡を抱いて川に沈んだとし、両書で異なる。

(5) 『八雲御抄』が『和歌童蒙抄』を引用することは、すでに指摘があるが、『八雲御抄』巻四・言語部科簡言にも、やはり『和歌童蒙抄』同様に『肥前国風土記』が引用され、「ひれ振り」と「形見の鏡」の両説話が一項目に併記され

る。

(6) 『袖中抄』中でも考証されるように、男主人公が渡った国は、「新羅」「百済」「唐」「任那」「漢国」と諸書により一定せず、『松浦宮物語』との単純比較はできない。

(7) 歌学書・注釈書などでは、一つの和歌・歌語に収斂する別伝が渾然一体となる例もまま見られる。成立は鎌倉期まで溯れるとされる『陽明文庫本堀河百首古注』は、小稿中に引用した「堀河百首」基俊歌(初恋・一一三二)を注して、「松浦姫とは遣唐使を慕つ沖の石となれる也 佐用姫は大伴狭手彦か妻也」と、『十訓抄』にも見える「望夫石」の故事をさよ姫にあてはめる。『和歌色葉』には「松浦明神とて今におはするは、かのまつらさよ姫のなれる也とぞいひ伝へたる。」と、さよ姫が松浦明神となったとする説が挙げられる。出典が異なるものであっても併記し示される「松浦」をめぐる別伝が、まったく異なるものと理解されていたとは考えられないだろう。その意味で、「形見の鏡」説話も「松浦」をめぐる説の一つとして、「ひれ振り」説話に交錯するものと捉えられていた可能性も考えられると思うのである。

(うんの・けいすけ 本学大学院博士前期課程)